

【京都市教育長賞】

兄から学んだこと

京都光華中学校 2年 村松 晴香

私には、知的障がいを持った高校生の兄がいます。兄は私と違い、まともな会話ができません。なので、コミュニケーション道具を使って会話することが多いです。そして、人一倍こだわりがとて強いです。自分の食べ物やテレビの音量やチャンネル。これらが思いどおりに行かないときや機嫌が悪いときは、心が不安定になります。すると、自分が落ち着くために大きな声を出します。理解して下さる方もいるのですが、障がいをあまりよく知らない人はとても変な目で兄をみてきます。私は、世間でこんなに障がいの認知度が低いのか、と驚きました。特に私の同年代の友達は、全然障がいについて知らない人がとても多いです。若い人たちは、あまり障がいについて知らないのではないかと思います。

この前、私が友達と駅周辺を歩いていました。すると、近くにおそらく障がいを持っているであろう人が歩いていました。その人は大きな声を出してにこやかに歩いていたので、「機嫌がいいのかな。」程度にしか思っていませんでした。兄も同じような行動をするので、特別な感じはしませんでした。しかし、友達は「あの人ちょっとヤバくない？」と笑いながら言っていました。まるで陰口を言うみたいに。まさか友達がそんなことを言うとは思っていなかったのです。ただただ悲しかったです。私はただ、「はやく行こう。」と言ってその場を去ることしかできませんでした。私は、障がいについて知らないから、障がいについて悪く言えるのではないかと、思いました。

私は、障がいがあるから差別をすることはよくないと思います。しかし、個性とは違って、人の助けがないと補うことのできない所もあるから、障がいは「個性」ではなく「障がい」と呼ばれるのだと思います。障がいがある分出来ない事が1人1人にももちろんあります。しかし、皆さんと同じように意志があり、自分の得意なことをがんばっています。私が昔、兄の通っている支援学校の文化祭に行きました。そのときに、全員ががんばって仕事に取り組むところを見て、とても感動したことを今でも覚えています。支援学校に通っている方が、つくったものを販売していたときの、いきいきとした表情が、幼い私は大好きでした。今も、もちろん大好きです。

皆さんは、障がいを持った人をどう思いますか。私は、障がいを持っていること以外は、本当に私たちと同じだと思います。皆、自分の意思を持っていて、皆、何か物事に対して努力をする。誰かが困ったときは、皆で助け合う。その助けが人一倍、障がいを持っていると必要になってしまう。このことを若い人は知らない、または知る機会がなかったのではないのでしょうか。そうでなければ、自分とほぼ同じ人間に対して差別をする訳がないと思います。

若い人に障がいについて知ってもらうために、全国の小、中、高等学校で障がいについて考える授業、または講座を開くべきだと思います。しかし、私は決して、児童や生徒に障がいが「かわいそう」と他人事のように思っほしくないです。障がいは身近なものであり、誰でも障がいになる可能性があることを、私はより多くの人に知っほしいです。

私は、障がいは身近なものである、と言いましたが、あまりピンとこないかもしれません。例えば、事故で障がいをわずらってしまう。歳をとるにつれて障がいをわずらってしまう。いつ皆さんが障がいを負うかわかりません。そして、あまり知られていないのが、精神に障がいがある人もいるということです。身の周りに、人の悪口ばかり言う人はいませんか。その人に異常を感じたら、その人は何か障がいがあるのかもしれません。しかし障がいがあるからしかたない、とはならないでください。あなたのためにも、その人のためにも、しっかりと注意することが必要だと思います。

私は、今まで友達に兄の障がいについて話すことが怖かったです。障がいに対して抵抗がある人だったら、私のことを嫌うかもしれないとずっと思っていました。しかし、これからは、私から身のまわりの人へ障がいについての理解を深めて、障がいがある人に対してより優しい社会を創りたいです。障がいを持って立派に生きる兄のことを皆がかっこいいと言ってくれるような社会です。私は、兄がいたおかげで、障がいについて理解ができ、こうして障がいの認知度を増やしたいと思うことができました。苦勞することもありましたが、本当に兄が居てよかったと思います。そうでなければ、こうして障がいについて知ることができなかつたです。これからも、たくさん障がいについて知ろっと思っます。